

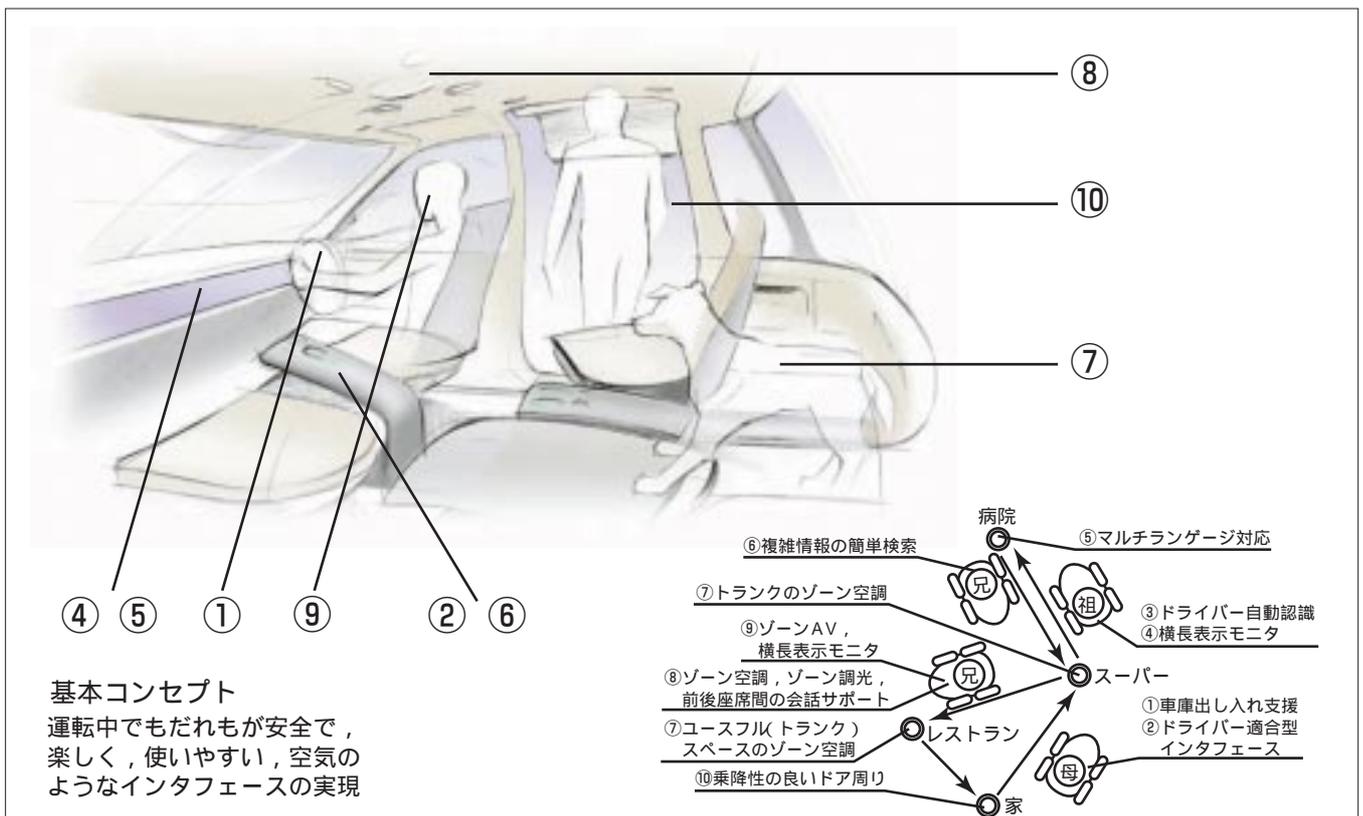
ドライバー適合型インタフェース

大矢富保*
 沢田久美子*
 上村 勉*

要 旨

21世紀に向かって、“社会マクロ環境変化” “人間とモノの関係の変化” から、ISO・13407 (JIS化予定) の発行など国際的にもユーザー中心の“ヒューマンセンタードデザイン” が課題になってきている。特に自動車においては、ユニバーサルデザインとエコロジカルデザインの融合等による提案が求められている。“だれもが生活しやすい環境作り” を基本概念に、真の生活しやすさと使いやすさを探究し、だれでも限りなく等しく満足度の高い生活環境と製品を提供していき、ヒューマンセンタードデザインの実現を目指すことが重要である。

生活者が様々な情報を有効に活用できる仕組みを“ドライバー適合型インタフェース” で実現し、ドライバーが意識することなく快適で安全に使用できる自動車空間環境を提供する。これにより、ユニバーサルデザインの視点では、生活者に少しでも長く運転できる環境の提供によって行動範囲の拡大など自立した生活を支援する。エコロジカルデザインの視点では、エネルギー削減や環境負荷の軽減を支援する。そして、“ドライバー空間” と“同乗者の個別空間” という二つの視点で徐々に実現する。改善型ではなく、解決型のアプローチを目指す。



ドライバー適合型インタフェースの事例シナリオ

Uさん一家のお兄さんが退院することになり、皆で迎えに行くことになりました。
 ユニバーサルなUさん一家 - おじいさん(70歳), お父さん(46歳): サラリーマン, お母さん(45歳): 専業主婦, 免許歴2年, 兄(20歳): 学生, ホームステイの子供(10歳): 米国人, ペット(中型犬5歳): 家族の一員, どこへ行くのも一緒